

紀尾井ホール で会いましょう vol. 1

新日鉄創立20周年記念事業として95年春にオープンした紀尾井ホール。新日鉄およびグループ各社によって設立された(財)新日鉄文化財団によって運営され、社会の良きパートナーとして新日鉄の音楽文化活動を推進しています。今月号からお届けする企画「紀尾井ホールで会いましょう」では、その様々な活動を紹介いたします。



豊潤な響きで今甦る18世紀オペラの世界!!

紀尾井だけがお届けできるオペラの真髄

東京室内歌劇場公演

パイジェル口の「セヴィリアの理髪師」

紀尾井ホールがオペラ劇場に変身! 出演者の声がホールの隅々まで響きわたり、紀尾井ならではの室内オペラの最高のステージがつけられました。「セヴィリアの理髪師」はロッシーニが有名ですが、今回はジョバンニ・パイジェルロの作品で、紀尾井の音の良さが発揮されました。

公演の概要

8月30日/31日 紀尾井ホール

指揮: 若杉 弘

演出: 鈴木敬介

・30日 五郎部 俊朗(テノール) 菅英三子(ソプラノ) ほか

・31日 望月 哲也(テノール) 齊田 正子(ソプラノ) ほか

東京室内歌劇場オーケストラ

主催: 東京室内歌劇場

共催: (財)新日鉄文化財団

紀尾井ホールへようこそ!!

(財)新日鉄文化財団 事務局長 町田 龍一

教会、大学、ホテル、高級ブティックが立ち並ぶ町。そして大名屋敷の名残や江戸の香りが色濃く漂う伝統の町。これらの雰囲気絶妙に調和している紀尾井町に、「紀尾井ホール」があります。クラシックに邦楽と、公演の都度、多くの話題を提供してきました。本コーナーは、読者の皆さんにホールの活動の一端に触れていただくために企画しました。

どうぞ、『ニッポン・スチール・マンスリー』読者の皆さまの目で、耳で、ホールをご体験ください。



「紀尾井ホール」スタッフ 右端が町田事務局長



指揮者：広上 淳一 氏

トランペット：ハーデンベルガー 氏

新たな室内オーケストラの潮流がここに...

紀尾井シンフォニエッタ東京の挑戦！

紀尾井シンフォニエッタ東京 定期演奏会

R. シュトラウス / クープランのクラヴサン曲による舞踏組曲

新シーズンを飾るにふさわしい演奏とはこのことを言うのでしょうか。「オーケストラの繊細かつ輪郭のはっきりした演奏に感心した」「大オーケストラでは聴けない曲を取り上げているのは楽しい」と、お客様からのアンケート結果が物語っているように、まさに“室内オーケストラの醍醐味”を堪能できる演奏会となりました。

公演の概要

10月17日・18日 紀尾井ホール

指揮：広上淳一

トランペット：ホーカン・ハーデンベルガー

曲名：ハイドン / トランペット協奏曲 変ホ長調 Hob.VIle-1

ハルトマン / トランペットとウィンド・アンサンブルのためのリート

ハイドン / 交響曲 第100番 ト長調 Hob.I-100「軍隊」

主催：紀尾井シンフォニエッタ東京

共催：(財)新日鉄文化財団

「紀尾井友の会」会員募集中

会費は3,000円、特典は以下の通りです。

1. 紀尾井ホール主催公演のチケットを優先的に購入可能
2. 紀尾井ホール主催公演が10%割引。また、友好関係にある大阪のいずみホールと名古屋のしらかわホールの主催公演チケットが5%割引。
3. 会報誌『紀尾井だより』、公演情報、カレンダー等の無料送付
4. 講演会、ツアーなど会員のためのイベント開催
5. 新日鉄コンサート、新日鉄音楽賞受賞記念コンサート等への招待

お問い合わせ先：紀尾井友の会事務局

TEL 03-5276-4540 10:00~17:00(土日祝休)

「紀尾井シンフォニエッタ東京(KST)」を聞いてみませんか

KST定期公演(年5回)の年間連続券(1回券に対し約17%割引)を購入すると定期会員になります。

1995年4月にデビューした紀尾井シンフォニエッタ東京(KST)、紀尾井ホールの基本コンセプト「発掘、創造、育成、交流」に基づいて、レジデント・オーケストラとして設立されました。室内楽の分野で活躍するトップ奏者たちのもとに若く優秀な演奏家が集い、高い技術と音楽性を生かしたアンサンブルは年を追うごとに成熟し、国内有数の室内オーケストラに育っています。

2002年8月に特定非営利活動法人として独立。メンバーが積極的に運営に参画するオーケストラとして、世界トップクラスを目指しています。

お問い合わせ先：紀尾井ホールチケット・センター

TEL 03-3237-0061 10:00~17:00(日祝休) URL: <http://www.kioi-hall.or.jp>

オペラは誰でも楽しめるもの。 一度その魅力にとらえられたら抜け出せません。

オペラはイマジネーションを刺激し、育成してくれます。ぜひ、生で体験して下さい。

ゲスト
オペラ・コンサート・プロデューサー、
演出家

杉 理一氏



私の持論は「面白くなければオペラじゃない」

今年7月の新日鉄音楽賞特別賞受賞、おめでとうございます。

ありがとうございます。現在のような厳しい経済状況の中、芸術文化振興のために賞を出して応援している企業があるのは非常に珍しいことです。しかもオペラの演出・プロデュースという私の様な裏方に対する賞は特に少ないので、大変名誉なことであり、ありがたいと思っています。しかし、オペラは時には何百人というキャスト、スタッフが力を合わせて作り上げるようなものですから、私一人が受賞することに、申し訳ないような思いがします。

特に印象に残っているのはどのような仕事ですか？

神奈川県藤沢市の市民オペラ『ファウスト』の演出は忘れられない思い出です。合唱もオーケストラも市民によるものですが、彼らの情熱や純粋さに打たれ、改めてオペラの魅力に感動しました。ドライアイスの雲の中にファウストも悪魔のメフィストフェレスも包み込まれ、地獄へ落ちて見えなくなり、ヒロインのマルガレータだけが昇天して行くラストシーンが大評判を呼んだのも嬉しいことでした。私の持論は「面白くなければオペラじゃない」「面白い」ということは感動を与えるという意味ですが、そんなふうに感じてもらえるオペラを演出し、プロデュースしていきたいと思っています。

オペラの制作・演出や字幕監修を手掛ける「ニュー・オペラ・プロダクション(NOP)」を設立されましたね。

よく”私財を投じての運営“などと言っていますが、もともと私には私財なんて言えるほどの財産もないんです(笑)。舞台費、会場費、それに大勢のキャスト、スタッフの人件費など、オペラの制作には確かに多額の費用がかかります。老後どうなるかという心配はありま

すが、健康で元気だから、やっていられるのでしょう。もちろん妻の理解と支えもあります。夫婦そろって面白がり屋、つまり好奇心旺盛なんです。また、こんな小さなプロダクションがやっていけるのは、「ギャラなど安くても、いい仕事なら、ぜひやりたい」と言って協力してくれる人たちがたくさん集まってくれているからこそです。

「オペラの歌い手は心の中で感じていることを歌で表現しているんですよ」

オペラは「料金が」「難しくて敷居が高い」といった理由で少し遠い存在に思われがちですが、オペラの魅力について教えてください。

オペラは決して難しいものでも、特別な人たちのためのものでもありません。誰でも楽しめますから、ぜひ劇場に足を運んで本物のオペラを体験してほしいですね。生の空間で、歌い手やオーケストラと同じ空気を吸い、電子機器を通さない美しい音の振動を肌身に感じる素晴らしさは格別です。またオペラなどの舞台芸術は見る人のイマジネーションを刺激し育てるもの。現代社会がこれほどずさんでいるのは思いやりやイマジネーションが欠乏しているからだと思います。テレビやゲームで簡単に人を殺したり、人が殺されたりするのを見ていれば人の痛みを知る心が欠落するし、受動的に情報を与えられすぎるとイマジネーションも枯渇していくばかりです。若いうちから実際に自分で足を運んで美しいものを見聞きすることの大切さを知り、相手の身になって考えることを覚えれば、人は決して残酷にはなれないはず。オペラはそうしたイマジネーションを養ってくれます。私もイマジネーションを培い、オリジナリティやアイデアを持って、今までチャレンジしてきました。

プロフィール すぎのりかず

1931年生まれ。1954年、学習院大学卒業後、日活宣伝部入社。1958～87年、NHK音楽部テレビディレクターとして主にオペラ番組の演出を担当。1973年以降は二期会オペラ・スタジオ研究生の演出講師なども務める。1990年、オペラ、コンサートの制作・演出、コンサルタントおよび字幕監修を手掛ける「ニュー・オペラ・プロダクション」設立。自主オペラ公演の制作・演出のほか、依頼公演の演出も担当。2001年にはオペラの定期公演を打ち切り、依頼公演に重点を移す。翌年、舞台芸術創造フェスティバル2002に参加、『耳なし芳一』を東京文化会館で上演。来年1月には新国立劇場での「鳴神」と「俊寛」の再演(市川団十郎演出)に制作協力する。

今回は、第13回新日鉄音楽賞特別賞を受賞された、オペラ・コンサート・プロデューサーで演出家杉理一さんに話を伺いました。

*新日鉄音楽賞：1990年(平成2年)新日本製鉄創立20周年と同社提供の「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設けられた音楽賞。新日鉄では、この賞を通して日本の音楽文化発展のため、また、将来を期待される音楽家の方々のために、少しでもお役にたつことが出来ればと念願しています。



第13回新日鉄音楽賞「フレッシュアーティスト賞」受賞の小菅 優さん(左)と「特別賞」受賞の杉 理一さん(右)

初心者がオペラを楽しむには、どのようなことが大切ですか？

オペラに慣れていない人は「セリフでいいのに、なぜ歌うの？」と違和感を持つようです。そんなとき私はこう言います。「お台所で仕事しながら、あるいはお風呂に浸かりながら鼻歌を歌うでしょう。人間は気分が高揚すると歌いたくなるんです。オペラの歌い手は心の中で感じていることを歌で表現しているんですよ」と。つまり、それを約束事として納得したら、不自然と感じなくなるものなのです。オペラは一般に料金が高いのは事実ですが、少し贅沢でも、たまには心の栄養補給のためにいいではありませんか。まずはお金をためて一度見て下さい。その素晴らしさに一度はまったら、なかなか出られませんよ。

いい公演を探すにはどうすればいいのでしょうか？

新聞や雑誌の批評をチェックしたり、オペラに詳しい人に聞いたりすると思います。それに、自分の好きな歌い手や指揮者を見つけることも大事です。映画スターと同じで、仮につまらない公演でも、好きな歌い手が出れば満足できるということもありますから。それに今は、探せば安くて面白い公演もたくさんあります。インターネットや楽器店などに置いてある情報誌などをチェックしてみるといいでしょう。

祖先から譲り受けた血を生かして、日本の歌を歌うのが一番合っているはずです。

今後の活動についてお聞かせください。

NOPIは一昨年、定期公演を打ち切り、依頼公演やオリジナル・オペラの地方上演などに重点を置くようにしました。これは私の体力的な問題もありますが、あくまで次なるチャレンジへの準備です。NOPがこれまでに上演した『鳴神』『耳なし芳一』『カルメン法廷』『おこんじょうり』などの自主制作オペラは、小さな劇場、少ない予算でもいいものを作り上げられるソフトです。これを地方へ、そして海外へも持って行き、日本のオペラの振興や国際的文化交流に役立てたいというのが私の願いです。定期公演を行いながらでは地方や海外へまで発信するのは難しいと考えて、定期公演打ち切りの決断を下しました。

海外にはどのような発信をするのですか？

海外で広く知られている日本の文化といえば歌舞伎に文楽、オペラでいえば『夕鶴』、そして日本を舞台にした『蝶々夫人』くらいでしょう。私はそれが悔しいんです。『耳なし芳一』も『鳴神』も

名作だと自負していますし、あの日本的な題材と音楽は海外へ持って行けば大変なインパクトがあると思います。外国の友人にも「海外でも称賛間違いなしの作品なのに、なぜ持って行かないのか」と言われます。それがまた悔しくてね。日本人がどんなに上手にイタリア歌劇を歌っても、やはりイタリア人を凌駕できません。日本人も祖先から譲り受けた血を生かして、日本の歌を歌うのが一番合っているはずです。それを海外で訴えていくためにも『耳なし芳一』や『鳴神』はびったりの作品だと思います。

オペラを通して日本の文化を発信していくということですね。

そうです。もちろん、ほかにもいい日本製のオペラはありますが、それを海外に送り出すルートと資金が欠けているのです。アメリカでは歌い手や劇団に大スポンサーがつきますが、日本ではまだまだ。日本人の心の中では文化に対する意識が低いのでしょうか。でも、このすさんでいく世の中であって大切なのは文化です。お金を稼ぐことだけからは決して豊かな社会は生まれません。文化とは作り上げられたものではなく、作り上げていく過程こそが文化と考えます。それはまた東京などに一極集中すべきではなく、地方へ広めていくべきものです。オペラを通して、私はそうした文化を地方へ海外へ、根づかせていきたいと思っています。



藤沢市民オペラ「ファウスト」：ファウストは地獄へ引きずり込まれ、マルガレーテは昇天するラストシーン（藤沢市民会館）



ニュー・オペラ・プロダクション
第5回公演オペラ「耳なし芳一」(日本都市センターホール)(セシオン杉並ホール)



第4回公演文楽人形オペラ「鳴神」